

卒業生、修了生の皆さん、本日は、誠におめでとうございます。

また、残念ながらここにお迎えすることはできませんでしたが、この晴れの日を迎えるまで、その成長を傍らで見守ってこられた御家族の皆さまにも、日本体育大学を代表して、お祝いとともにこれまでの御支援に厚く御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の収束にまだその兆しがみえてこない現下にあって、安全確保・感染防止の方策を種々講じ、規模を縮小・簡素化することで、本日このように卒業式・学位記授与式を挙げるに至りました。

ここにはスポーツ文化学部の第一期生をはじめ、体育学部健康学科、社会体育学科、児童スポーツ教育学部、保健医療学部の卒業生及び大学院体育科学研究科、教育学研究科、保健医療学研究科の修了生が参列しております。何卒、御理解賜りたくお願い申し上げます。

さて皆さん、それぞれの集大成となるべき大切な1年間をさまざまな制約のもとに過ごさなければならず、すべてが未知の体験となりました。

学業や対人関係、就職・研究・競技活動への不安など、これまでになく強固な壁が目の前に立ちただけ、そのどんなに厳しい環境からも決して逃げ出すこともせず、乗り越えようと努力を続けたみなさんの姿勢は、本当に立派です。

キャンパスを自由に行き交うことができない逆境のなか、新たな気づきや発見が数多くあったに違いありません。

夢と理想を実現するため、積極的に日体大以外の世界に眼を向け、多様な価値観に触れた皆さん、その足跡(あしあと)は間違いなく残されています。

試行錯誤を重ねた実験や何度も読み返した先行論文の数々、「実践と理論の一体化」を念頭に地道に積み重ねたその日々は、ひとつの成果として多くの人びとの支持を得ています。

一回りも二回りも成長した自身の姿に自信をもってください。

ところで、4年前の入学式の際、わたしは自身の経験をこんな風に語りかけました。

大学3年生のとき、左脚腓骨を骨折しました。オリンピックを目指していたわたしは、選手生命が絶たれるほどのとてつもない絶望感に襲われました。

不安に駆られ、焦る毎日、このまま暗闇のトンネルからずっと抜け出せないのではないか、「体操競技はもう2度とできないかもしれない」という担当医の言葉に病室のベッドで悶々とする一方で、どうこの苦しい状況を克服すべきか、新たな闘志が沸々と湧いてきたのを覚えています。

左脚はギプスで固定され、天井から吊されたままでしたが、体操競技を続け、オリンピックの表彰台に必ず立つのだという夢を描いていたからこそ、必死で取り組みました。

3ヵ月に及ぶ入院期間中のトレーニングで、退院時には、それまでのシャツが着られなくなるほど、細かった腕が太く力強くなり、上半身の筋力が確実に付いていることを実感できました。

わたしは、この辛い経験から、苦しい場面に遭遇すると、いつも次のように考えてきました。「ピンチのときこそ、どこかにチャンスの芽がある。何ごとにも継続していけば、それはやがて必ず力になり、本気になって真剣に取り組めば、きつとなにかが変わる。」と。

わたしにとって、オリンピックがはっきりとその視野に入ってきたそのときに余儀なくされた大きな怪我は、まさにピンチをチャンスに換えることのできた、かけがえのない貴重な体験であり、必要な時間だったのです。

その後、1984年のロサンゼルスオリンピック代表に選ばれ、表彰台で、君が代を聴くことができたのも、こうした厳しい状況に目を逸らさず、真正面からその壁と対峙し、必ず乗り越えてみせると決意したわたしが、そこにいたからだと確信しています。

このときのわたしの姿が、まさにいまここにいる皆さんと重なります。

誰もが想像できなかったこの 1 年間、それぞれ叡智を結集して取り組んだことは、皆さんにとってかけがえのない唯一無二の財産です。

「人には必ず、それぞれ輝ける場所がある」、そう強く信じ、皆さんにも、その在処をこの日体大で是非、見つけ出して欲しいと伝えてきました。

いま、ここに立つ凜とした姿はとても美しく、ひとりひとりが解き放つその光は、金メダル以上に眩しく感じられ、わたしは大きな幸せとともに皆さんを誇りに思います。

これからも世界のあらゆる場所で燦然と輝き、母校日体大を照らし続けてください。皆さんのますますの飛躍とさらなる研鑽を大いに期待しています。

卒業生、修了生の皆さん、改めてその門出を心からお喜び申し上げます。

令和 3 年 3 月 15 日  
日本体育大学  
学長 具志堅 幸司